



TITLE:

# アッパース朝における豫算財政について(下)

AUTHOR(S):

清水, 誠

---

CITATION:

清水, 誠. アッパース朝における豫算財政について(下). 東洋史研究  
1960, 19(1): 65-87

ISSUE DATE:

1960-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148173>

RIGHT:

## アッバース朝における豫算財政について (下)

清水 誠

### 四 稅務行政と徵稅請負

國家豫算表が各種の豫算表を綜合して編成されることはすでに述べたが、この節ではアッバース朝の豫算制度に特に重要な役割を果している稅收部門の機構およびその業務内容を説明したい。前節で少し觸れたように、官廳には總務系<sup>スル</sup> (asī) と監查系<sup>ズマーム</sup> (zimām) があり、前者が豫算表の作成に當る。第三期における總務系稅收部門の官廳はアル・サワード廳 (diwān al-Sawād) 、東部方面廳 (diwān al-mašriq) 、西部方面廳 (diwān al-mağrib) であり、これらは最も等級の高い官廳である。ヒラールによれば、二八〇年代の前半に、宰相 Ubayd Allāh b. Sulaymān の補佐としていた Ahmad b. al-Furāt が全國の徵稅業務を管理する官

内總理廳 (diwān al-dār) を創立し、その部課に東部方面課 (mağlis al-mašriq) 、西部方面課 (mağlis al-mağrib) を包含していたが、アッバース朝から獨立していた地方を再征服するに従つて組織も擴大され、これら二課は回曆二八六年に宮内總理廳から獨立して「廳」に昇格した (Hilāl 131-32; Tab. VIII, 197) 。ヒラールによればこの直後に、

……私 (ʿAlī b. ʿĪsā) はその官廳 (西部方面廳) で、宰相 Ubayd Allāh b. Sulaymān のために書記官をしていたが、彼は私に Mawṣil 及び al-Zabāt (Zab 兩河地帶) の稅收に關する豫算表の作成を命じたので、それを作成して彼に提出した。…… (Hilāl 255)

とあるように、當該擔當地區の豫算表を作成している。また同官廳について、

Abū Ahmad al-Muḥassin は西部方面廳を擔當して、西部

方面の徴税業務に関する豫算表を父（宰相 Ibn al-Furāt）に提示したが、彼の清書係（muḥarrir）が誤寫をして、三〇三年とすべきところを二九三年と書いていた。……（Hilal 145）

とある。宰相 Ibn al-Furāt が第二次宰相になつたのは三〇四年 dū l-ḥiḡḡa (XII) 月八日（九一七・六・一）であるから（Misk. I, 41; Hilal 286; Arib 61）三〇五會計年度の豫算表編成期にあたり、宰相の更迭によつて各官廳がただちに新年度豫算表の作成を行い、これに前々年度の恐らく決算を引用していたことを示している。徴税を中心とした地方行政を擔當するこれら中央官廳はウマイヤ朝まではいわゆる「税務廳」diwan al-ḡarāḡ 一本だけであつた。これは地方に派遣される徴税官（もしくは總督）の權限が強力であつたことにもよる。ところがアッバース朝では中央集權化の傾向として、中央政府の官廳業務が次第に重要視されるようになり、税務廳も分岐した。すでに第二代カリフ al-Manṣūr の治世中にバスラおよびその諸徴税區擔當税務廳、クーフ、および、同管轄地擔當税務廳の存在が知られる（Ḡaḥṣ. 124; Tab. VI, 352）<sup>(2)</sup> 第四代カリフ al-Hādī の治世中にこれらは統合されて Iraq 擔當税務廳（diwān al-ḡarāḡ al-Iraqayn）となり、Ḡaḥṣ. 167; Tab. VI,

408）。次の Hartun al-Rasīd の治世末ではアル・サワード擔當税務廳など三官廳が併立している。<sup>(3)</sup> 第三期のアル・サワード廳、東部方面廳、西部方面廳も第一期のこれらの官廳に起源を持つが、ただ、税務廳がアル・サワード廳の雅號的名稱になつたように、業務の性格も變化していることを考慮しておかねばならない。

次に當該税務官廳即ち政府側と徴税官との關係について述べたい。ヒラール所収 al-Fanūjī (384/994 没) によれば、al-Muʿtadīd 時代に税務廳および私領地廳長官、同補佐になつた Ibn al-Furāt 兄弟が Bāduraḡ（近の大徴税區）の徴税官 al-Nahīkī に擔當徴税業務に関する計算書の提出を求めていた。

「……ついに任期二年間にわたる計算書が提出され、私（弟の ʿAlī b. al-Furāt）はそれに關する意見書（muʿāmarā）の作成に多忙をきわめた。……我々兄弟二人は宰相の檢閲を受けるため伺候した。私は意見書の第一事項として、彼（徴税官）は賈却濟穀物の代價（taman）に關する細目（tafsīl）を條陳しているが、その細目の實際の總計は彼が述べてゐる總計より 1,000 dinār も多」と記していた。……」（Hilal 76）

これによれば、徴税官から擔當業務の決算書とすべき

hisāb<sup>ヒサーブ</sup> が提出され、これに對して政府側は意見書を作成してゐる（同様例 Hiial 167 も参照）。この徴税官は宰相 (Ubayd Allāh b. Sulaymān 派に屬し、その權威の下に業務上の不正を行つていたが、これが意見書によつて暴露された例である。この意見書の書式は次のような資料によつてやや推測することができる。西部方面廳長官（もしくは宰相）をしていた 'Alī b. 'Iṣā は反對派の Ibn al-Furāt 傘下の一徴税官<sup>アミール</sup>に對し意見書を作成し、職務怠慢によつて彼に 100,000 dinar を課した。'Alī b. 'Iṣā は意見書の各事項<sup>ベイン</sup>について反論があれば負課金を差引くが、さもなくばそれを支拂わねばならないと云い渡した。徴税官はとるあえずその意見書を持歸り、Ibn al-Furāt に各事項に對する答申の指示を求めた。これに對し Ibn al-Furāt は次のように説明している。

「彼は意見書の第一事項として擔當徴稅區の穀物に係る榷目の剩餘 (faḍl al-kay) を記し、未提出分として高額の金高を算出し、次の事項で産額比率の〔稅〕穀のうち未提出分を横領したとし、證據を挙げ、お前にかんがりの金額を強いている。ところで文書作成法 (qanūn al-ḥiṭāba) ではなきに穀物の基本總目 (uṣūl) による横領を述べ、その次に榷目の剩餘に移らねばならない。榷目の

獅餘から始めた場合はその基本總目はすでに正しいと見なされる。これは法外な誤りである。事實上は正しいが、外見上は誤つてい  
 ぬ。……」(Hilal 所収 al-Tanūhī 128-29)

これによると、意見書は幾つかの必要事項からなり、しかもその順序が法的に規定されていたように、當面の意見書が結局無効となり、徴税官から追徴金を取る事ができなくなっているから、文書作成法が如何に嚴格であつたかを知らなければならない。またヒラールに、アル・サワードに住む一地主が宰相 Ibn al-Furat に、當該徴税官が自己の私領地に對して賦課規準以上に課税したと訴願した際、

宰相はこれについて實情調査を行うよう (i)hrāḡ al-ḥa) 指令した。アル・サワード<sup>アル・サワード</sup>廳から覺書 (ḥarāḡ) が發せられ、それには昨年度の徵稅官の *ḡama'a* を再檢討した結果……と述べられていた (Hiial 163)。

とあるように、アル・サワード廳で作成される書類に「覺書」があり（同様例 Hial 166 も参照）、これによつて「訴願調査」の審議が行われている。覺書作成の資料となつた徴税官提出の「gamma」とは「hawari zimmi」に、

mulwafaga ムルワファガ ならぶ ナラブ ganna'a ガンナア は徴税官が擔當徴稅業務の終了に際して提出する總括的な計算書で、提出〔豫定〕額 (rafī) と收納濟額 (marū) との間が一致しないで提出される場合には

muwafaqa とは云わぬ (Maf. 38)。

とあつて、*gamā'a* は徴税官が提出する「收納實績書」であり (同様例 *Hiial* 165, 167 も参照)、前述の「計算書」と同じもので、*muwafaqa* は豫定通り收納された場合で、「實績一致書」と譯される。

これらの徴税官は普通政府によつて中央官吏より任命された者であるが、第三期の特徴はむしろ徴税請負人出身の徴税官である。ここで再び回曆二八〇年度の豫算表の編成過程を見ると、

*Aḥmad b. al-Furāt* と *ʿAlī b. al-Furāt* とは *Aḥmad b. Muḥammad al-Ṭā'i* と「協議」し、彼が送るべき金額を毎日 7,000 *dīnār* プラス月額 6,000 *dīnār* とする徴税請負 (*dāmān*) を締結し、徴税請負契約 (*ʿitizām al-dāmān*) と「送金」時期を指定した金額についての確定 (*taṣḥīb*) 證書を得た。次に彼ら二人は將來の日當りや月當りの經費を豫想し、その草案を持つて宰相のところへ行き手渡した。……私 (原著者 *b. ʿAbd al-Ḥamid*) はこの豫算表を得た。それは *Aḥmad b. Muḥammad al-Ṭā'i* が述べたこと、彼に請負わせる徴税業務および負課條件である徴税請負金の日々の國庫への送金等を含んでいた。…… (*Hiial* 所収 *b. ʿAbd al-Ḥamid* 10-11)

と記されているが、當時は小規模であつたとは云え、

國家財政の全歳入豫算が一徴税請負人 (*dāmin*: *Hiial* 109 参照) との契約にかかつてゐる。この *Aḥmad b. Muḥammad al-Ṭā'i* はタバリーでは、回曆二六九年に始めて現われ、クレーファならびに同所轄地の徴税業務を委ねられ (*Tab. VIII, 109*)、二七一年には更にメディナおよび *Tarīq Makka* (メッカ道) を委任されてゐる (*Tab. VIII, 148*)。タバリーの文面は簡略で、断定はできないが、徴税請負によるものであること、従つてこれが少くとも第二期の末期から發生したことは疑いない。豫算財政上重要な役割を果したと考えられるこのような徴税請負とは如何なる機構を有していたかを検討する必要がある。ただ同じ *dāmān* でも地方政府に對する徴税請負 (例えは *Tab. VII, 288-89*) はこれに該當しない。問題にするのは中央政府で交渉されるものであつて、規模も本質も異なる。また *dāmān* とよく混同される *gabāla* (納税請負) はずっと低い段階のもので、勿論除外される。徴税請負に關する研究はまだ充分になられておらず、最新では *F. Løkkegaard*: *Islamic taxation in the classic period*, (Copenhagen, 1950), chapter IV, *gabāla and dāmān* (Tax-farming in the

Islamic administration) に取あげられているが、この兩者を全く同一視し、また史料の無謀操作を行うなど結論らしいものは何も出ていない。ここで徴税請負を契約の締結から執行、監督と順を追って説明したい。

……〔三〇〕六年 dū l-q'ada (IX) 月に私 (宰相 'Ali b. 'Isa) は al-Husayn b. Ahmad [al-Mağarā'i] を信徒の長の前に導き、その廣間で彼の證書を得た。それはエジプトおよびシリヤにおける *ḥarāḡ* 地と私領地の徴税請負 (*dāmān a'māl*) を、當該諸徴税區の經常費 (*naḥaqāt al-ratiba*) と軍隊の給與を (請負人負擔とつ) 除く年額 1,000,000 dinar づゝ契約した。それは一 *dirham* たりとも控除することなく國庫に収納されるものである。各徴税區毎の軍隊の給與、經常費總額についての證書も得た。……この證書は西部方面廳にある。…… (Misk. I, 107; Hikal 290 参照)

これは請負契約の典型で、請負った徴税區の税収入のうち國庫納付額を一定とし、同時に當該徴税區の經常費等もあらかじめ協定する。また契約の政府側の最高責任者は宰相であるが、手續など實務は當該稅務官廳で行われたことはヒラール (146) の例からも明らかである。契約額の算定方法については回曆三〇七年における Hamid b. al-'Abbas の徴税請負 (四年間) の事例から知ることができる。

〔宰相補佐〕 'Ali b. 'Isa は當該諸官廳長官達に、近年になされ

た諸査定額 (*ṭibar: ṭibra* の複數形) に従つて各官廳から平均査定額を算出するよう命令した。……そこでフル・サワードおよび *al-Ahwāz* の諸徴税區における [國庫] 送金額 (*maḥmūl*)、特別指定額 (*musabab*) ならびに經常費の査定額 (*ṭibra*) は三〇三〜三〇五年の三年間について年額平均 33,000,000 dirham に算出され、カリフ私領地、新私領地、al-'Abbās ならびに Ibn al-Furat よりの沒收私領地の査定額は、[國庫] 送金額、特別指定額について 8,800,000 dirham に算出され、Ispahan の税金の査定額は、經常費を含めてその三年間から割出された一年分として 6,300,000 dirham となり、合計年額 48,100,000 dirham となつた。…… (Misk. I, 70-71)

これによると、過去三年間における査定額の平均値が事項別に當該官廳で計算され、これを操作して全徴税額や國庫送金額が算出されている。また前年度の査定額と僅少の増額分で契約される場合もあった (Misk. I, 25)。

このように徴税請負人が徴税權を譲渡される場合、政府としてはその保證が安全であるかどうか情況調査を行つたようである。ヒラール所収 *Abū 'Abd Allāh b. Zingī* によれば、回曆二八五年前後のことづゝ、これまでユーフラテス河流域の多數の徴税區を請負つていた 'Abd Allāh b. al-Ḥasan al-Narsī ら兄弟が改めて徴税請負契約の更新を

出願した。これに對して、

〔當該官廳のアル・サワード廳を擔當してゐた〕 Abū l-Abbās [Ahmad b. al-Furāt] は弟の〔長官補佐〕 Abū l-Ḥasan に彼らが授任される徵稅業務に關する豫算表を作成し、それに際して還付分 (mardūd) のうちから彼らに義務づけるべき虚構の手當費や經常費 (ihṭisāb) 即ち實際經費として支出されている額を明らかにし、また驛遞官や情報官達 (aṣḥāb al-burūd wa-l-ṭabāʾ) が入手し、通報して來た穀物の買手達に係る金高ならびに、その istīnāʾ (穀物拂下げ利權料：第五節参照) に關する資料を利用するよう命じた。…… (Hilāl 171)

とあるように、政府側では徵稅利權にからむあらゆる條件を當該地の驛遞や情報機關をも利用して調査し、その結果を豫算表にまとめ (Misk. I. 25 参照)、これによつて契約額を調整する。ヒラールに記されている次例は徵稅請負人に有利に交渉された場合で、ミスカワイフ (I, 25) によれば年額 240,000 dinār と大麥 2,400 kurr の四年契約であつた。

かいつ Abū 'Alī al-Ḥagānī の宰相時代 (299-300H) に官廳の官吏達は Wasīf の徵稅業務に關する ḥāmīd b. al-'Abbās の第一次徵稅請負について、徵稅請負年次末に〔政府へ〕送金するという條件を與えていた。何故なら溝渠の開鑿、堤防の監視、種子收稅補吏 (mu'awīn) や同様經費に支出されるもののためであつ

て、この經費は彼に與えられた信用 (ṭibār) 年次の最後の年に交付され、その額は 90,000 dinār 除く。その〔實際の〕支出は政府官吏 (ummal al-sulṭān) が掌る。同じく條件として信用 (ṭibār) によつて ḥarāḡ [地] およびフッバス朝カリフ私領地の税金 157,000 dinār を徵稅請負年次末まで猶豫し、250,000 dinār (を年次末に送金すること) としていた。この金額に對する〔政府側の〕請求が續けられている間は、彼は徵稅請負の更新 (taḡdīd) によつて〔最終〕年を一年毎遅らせていた (Hilāl 34)。これによれば徵稅請負に莫大な經營資金を要する場合、政府がその一部を貸付けたら、請負つた業務の税金の一部の送金を一定期間猶豫して、これを一時的に經營資金に組込ませたりしている。しかも政府貸付金の取扱いは政府官吏が當るといふ條件を付帶している。これらの契約條件は利潤を追求する徵稅請負人と政府との力關係において協定され、請負地の状態や徵稅請負人の財力、そのときの中央政府の政情の如何によつてかなりの差異があつたと見なされる。

次に請負業務執行中の政府と徵稅請負人との關係を見る。ヒラールによれば、回曆三一年に Abū b. al-Furāt が第三次宰相となり、Abū Saḥl al-Nawbahī じ al-Mubārak の徵稅業務を、Muḥammad al-Bazawfarī じ al-Silīn

およびその分益小作地 (muzara'at) の請負權を前任者の調査とともに委ねていた (Hial 34)。

al-Bazawfari は諸種の報告書を作成し、これを宰相に書送つた。……宰相は首都で作成された意見書を彼に發送し、……彼および al-Nawabih に係る土木灌溉工事 (masalih) 堤防、種子、收税補吏等の支出の開始を命じた。これは三十一年度の耕作に對して支出されるものであつた (Hial 35)。

このように、兩者の間に書類交換が行われ、業務の第一期である耕作ならびに播種に必要な經營資金の交付開始命令が政府より出されている。これについては更に、al-Bazawfari の何度目かの政府への返書として、

すでに當地の分益小作人達 (muzari'un: 單數形 muzari) や住民が新規耕作 (三十一年度) のためとして要望する額を交付し始めており、三十一年度の徵稅請負に着手したい。ただ彼の力をもつてはそれをなしないので、四百人の高級傭兵を差向け、一般傭兵、七百人の歩兵および彼に依存する地方民を指揮させて彼に協力してほしい。…… (Hial 35)

と知らせ、これに對し政府から al-Hugari 傭兵隊、al-Masati 歩兵隊から各々百人を派遣し、業務遂行のため、歩兵五百人まで承認すると返信されている。これは徵稅請負人が分益小作人や納稅者乃至は農民の代表者に耕作資金

を交付し、被交付者の義務即ち耕作や灌溉工事を督勵するようこれらの兵が派遣されたのである。このように徵稅請負人の權力が弱い場合、その要請によつて政府側から補強して業務の遂行に當らせた。

なおここで注意しておかねばならないのは納稅者に對する實際の課稅方法は徵稅請負人の自由意志によらなかつたことである。課稅はその地方もしくは土地で定められている稅法、即ち一般的には土地測量制 (misaha) か產額比率制 (muqasama) でなされ、請負人でない通常の徵稅官が任命される場合と變りない。これは各資料の性質から個々の徵稅請負人について求めがたいが、例えば回曆三〇七年における Hamid b. al-Abbās の徵稅請負のうち、Ishāhān については免職された前任者に引續いて Abū Muslim Muhammad b. Bahr と Abū I-Husayn Ahmad b. Sa'd の二人が徵稅請負權を下請されているが (Misk. I, 59-60) 前者は一時的な叛亂者から回復されたばかりの Qumm (Misk. I, 51-52) を委ねられたらしく、Ta'rib-i Qumm (106, 142) によれば Qumm では土地測量制で徵稅されていたが、三〇九年に徵稅官となつてやはり土地測



量を行っている。

さて通常徴税官が業務の終了期に當該稅務官廳へ計算書<sup>ヒヤール</sup>即ち收納實績書<sup>ミヤール</sup>を提出することは前に述べたが、これは徴稅請負人出身の徴稅官でも同じである。ヒラールの記載に

‘Ubayd Allah b. al-Hasan al-Narsi は二八二年度における al-

Sib al-A'la の徴稅業務<sup>ミヤール</sup>收納實績書<sup>ミヤール</sup> (ḡama'a) を稅務廳に提出した。書記官 Ahmad b. Muhammad al-Harīḡ がそれを檢査し、その領收檢算書<sup>ミヤール</sup> (mu'amat tahsil) を作成したところ、檢算書の殘高にかなりの混亂を見出した。そこで收納實績書と照合したが、誤謬を發見できなかった。…… (Hilal 164-65)

とあつて、收納實績書の提出と同時にそれが嚴密に檢査されたことが分る。この事件ではこの書記官が各經費目を一種の複式計算法 (動詞 arrāḡa: 名詞 ta'rīḡ, Mat. 37 參照) によつて計算したところ、1,300 dinār の不足を發見し、この事項を稅務廳長官補佐にまわした。徴稅請負人 Ubayd Allah b. al-Hasan al-Narsi はそれを調べた結果、彼の書記が經常支出〔簿〕(ihisab) の清書の際に、洪水對策費の 1,300 dinār を見落してゐたことが分つたので、文書作成法 (ḡukm al-kitāba) の規定に従つて、當該經費證 (dārīḡ bi-l-naḡa) を提出したが認められず、政府側は彼

に 1,300 dinār を負課している。即ち額面實績額が實收よりも 1,300 dinār 上廻ると見なされたわけで、この場合は官廳側擔當者と徴稅請負人とが異なつた派閥に屬していたことも絡み合つてゐる。

徴稅請負人が業務を終了して提出した國庫納入額に不足があれば契約違反として政府はその支拂を要求した。

かつて (Rif) al-Mu'tadid はこれに似たことを 'Abū l-'Abdās Ahmad b. Bistān にした。即ち al-Mu'tadid は彼の Wasit に関する徴稅請負上の不足額 (aḡz) の支拂を要求し、Ibn Yahir 邸に拘留して 70,000 dinār を徴還することを認めさせた。…… (Hilal 83)

また徴稅請負人が政府で保證した額を實際に徴収できなかった場合、殘高は請負人の自己負擔として政府に納付しなければならなかつた。回曆三〇二年頃 Fars の徴稅を請負つた (Abd al-Rahmān b. Ḡa'far al-Sirāzi の例 (Hilal 34) が挙げられる。しかしこのような追徵金を徴稅請負人から取立てるか否かは中央官僚との派閥關係にも大きく左右されてゐた。請負人の利益である徴稅請負における剩餘額<sup>フアドル</sup> (faḍl) については特に當該稅務官廳の總務課 (maḡlis al-aḡs) が調査し、徴稅請負人の事後監督を行っている (Hilal

32; Misk. I, 57)。

このように徴税請負人と當該稅務官廳とは常に密接な交渉を行つて、徴稅業務を執行監督したが、これは云わば文書通達を手段とするだけであつて、業務に對する實際の監督は中央政府から現地に派遣される監察官 (mušārif: Hīāl 9 参照。もしくは mušrif) が行つた。通常史料にはその職權名である iṣṭāf 監察として現われる。例えば、

36 年 (301 H) 'Abū Bakr Muḥammad b. 'Alī al-Mādarā'i はヒジントの徴稅業務とシリノの徴稅業務に對する監察……を委任された (ʿArib 44)。

〔回曆三二八年宰相〕 Abū l-ʿAbbas Ahmad b. ʿUbayd Allāh al-Ḥasbi 及 Fars 等も Kirman の徴稅業務に對する監察を授任し…… (ʿArib 150)

などが擧げられる。元宰相であつた ʿAlī b. ʿĪsā は回曆三二二—三二四年にヒジント、シリヤなど西部方面の徴稅業務に對する監察を委ねられ、徴稅請負人 al-Ḥusayn b. Ahmad al-Mādarā'i らの業務を監察し、追徴金として 147,000 dinār の手形を政府に送つた (Misk. I, 141, 146; ʿArib 124, 129; Hīāl 309, 319-21, 322)。この監察はまた naẓar と呼ばれ、監察官は nāẓir と云ふ (Tab.

VIII, 193; ʿArib 134; Sūh 201, 230, 231, 235) 13) の監察組織がいつ頃設けられたのか不明で、私見の及ぶところでは第三期を溯ることはできなかった (Hīāl 261)。監察業務に關する資料は極めて稀であるが、のちに宰相になつた稅務官吏の ʿAlī b. al-Furāt が回曆二七九年頃徴稅業務について語つた言葉の中に、

「しかじかの徴稅區はしかじかの情況にあつて、當地の徴稅官は無力であるから、mušarik (協同者：第五節参照) または監察官 (mušārif) を付するものが望まふ」 (Hīāl 9)

とあるように、その目的は國家權力の側面的擁護にあつたと思われる。ヒラール所収 ʿAbd al-Raḥman b. ʿĪsā によれば、回曆二九〇年頃 al-Raḡān 地方の徴稅官であつた Ibrāhīm b. ʿĪsā が兄 ʿAlī b. ʿĪsā (西部方面廳長官) の斡旋で、宰相 al-Qasim b. ʿUbayd Allāh 及び Wasit の徴稅業務に對する監察に派遣されている。これは當時宰相を除いて最高の官職にあつた Ibn al-Furāt 兄弟の私領地經營の不正摘發を主目的に行われたもので、調査の結果を諸種の報告書にまとめ、歸京後宰相に提出した。その報告書の概要が次のように記されている。

Ibn al-Furāt の代理人達 (wukalā) が Wasit における彼ら兄弟の私領地の土木灌漑工事のために控除取得した額に關する報告書——土木灌漑工事報告書 (‘amal al-masāliḥ: p. 134, l. 13)——ではそれは年間 20,000 dinār 以上に昇る。他方國領地 (dīyāṭ sultān——dīyāṭ al-sultāniya: p. 133, l. 14, 17) を横領して彼らの私産 (『私領地』) に加えたものに關する報告書——横領私領地に關する報告書 (‘amal bi-l-dīyāṭ al-mustadafa: p. 134, l. 15)——ではそれは al-Yahdī と同じ知られる収益約 50,000 dirham の打穀場を含めて約三〇餘の打穀場に昇る。」(Hīāl 133—34)

これらをもとにして會議場<sup>マフリス</sup>で監察官と Ahmad b. al-Furāt の間に對論がなされ、監察官は彼にかなりの金額を義務づけている。要するに監察權は政府内部で絶大な權力を持つ高官に對しても強力に行使されたことを示している。

以上述べたように徵稅請負<sup>ダヤイン</sup>では通常の徵稅官の場合と比較して國家の統制力が非常に強い。これは國家豫算即ち歲計均衡とその財政難に起因する。通常の徵稅官が國庫へ納付する額は當該地の經費を支拂つたのちの餘剩額であつて、しかも一定していない。<sup>(4)</sup>業務の執行が徵稅官に一任されるだけで、政府はあまり干渉しないからなほさら不安定である。一定の國庫收納額が保證されている徵稅請負は國家財

政の安定策と見ることが出来る。そのことは徵稅請負人の出身層を検討することによつても證明できる。宰相 ‘Alī b. al-Furāt の言葉に、どのような階層を徵稅請負人に選ぶかにつて、

「げに徵稅請負契約<sup>アムル・ア・ダヤイン</sup> (‘aqd al-daman) は金持の商人か、忠實な行政官 (amī) か、富裕な農場經營者 (tami) に與えることが望ましい。軍人については、もし彼らと徵稅請負を契約し、その税金の支出の責任を委ねれば、彼らに叛亂を呼起し、政府に對する服従心を捨てがちである。」(Hīāl 71)

と述べている。政府の認める徵稅請負の適格者は中央官僚を除いて豪商にしろ大規模農場經營者にしろ經濟的實力者であることに注目しなければならない。しかも同じく宰相 ‘Alī b. al-Furāt の言葉として、

「徵稅請負人はあたかも居住者が自己の宅地 (‘aḡā) について意見を持つているごとく、當該稅収<sup>ムタタウ・アウ</sup>について意見を持つている。」(Hīāl 258)

とあるように、徵稅請負人の意見が非常に尊重されている。これは徵稅請負がアッバース朝の徵稅機構に深く食込み、政府の直接的な財政基盤がこれら富裕階級の財力にあつたことを示すにほかならない。従つて徵稅請負の弊害が下層

階級に對する經濟的壓迫となつて現われている。すでに第二期の末期、徵稅請負人 Ahmad b. Muhammad al-Tā'i について

この (272H) 年、Bagdad で物價が騰貴した。小麦粉運搬船が Bagdad へ下航するのを Samarra の住民が妨害したからである [Ahmad b. Muhammad] al-Tā'i は私領地の地主達 (arbab) が穀物を打穀 (= 製粉) することを妨げ、これによる物價騰貴を待たために、それを組織的に行つた。これに對し、Bagdad の住民はオリブ油、石鹼、聚寶やその他のものを Samarra へ運ぶことを妨害した。これは ramadan (XI) 月半ば (八八六・二・下旬) に起つた (Tab. VIII, 150)。

とあり、この翌月の sawwal (X) 月には民衆が物價騰貴のため暴動を起してゐる (Tab. VIII, 150-51; ibid, p. 153 参照)。また徵稅請負人出身の宰相 Hāmid b. al-Abbās が回曆三〇七年に宰相の資格のまま徵稅請負人になるという變則的ではあるが、廣大な地域を請負つたときには、翌三〇八年から三〇九年にかけて(九二二) ハングダードでかなり長期の穀物騒動が起り、政府はついにこの徵稅請負契約の無効布告を出している (Misk. I, 59-60, 69-75; Arib 78-79, 84-85)。これらは徵稅請負人が自己の管理する稅穀

の値上を待つため、穀物の供給を大々的に阻害して起つた物價騰貴の典型である。

他方徵稅請負が國庫に一定額をもたらすとしても、これはあくまで被授權者徵稅請負人の國家に對する保證(もしくは信用)に支えられており、この保證は國家信用と對立することが指適されねばならない。これについてはのちに稿を改めて論ずる機會があると思つた。

註

- (1) 例へば Hīāl 271 に、uṣūl (asl の複数形) dawāwīn al-Sawād wa-l-maṣriq wa-l-magrib。A. Mez: Die Renaissance des Islāms, p. 68 参照。
- (2) これらの官廳やそれに相當する機關が作成する 'amal (豫算表もしくは報告書) には一個人の私領地や大總督以後のカリフ用特別私領地に關するいわば目的別豫算表も存在していた (Hīāl 365; Sūri 145)。
- (3) Gāh. 277. al-Rasīd が 192H 年 ġumāda l-aḡira (IX)/808. 4 に死んだとき、……ブル・サワード擔當稅務廳を Sulaymān b. Ymān が、シリフ・エジプト、北アフリカ、モスル、アルメニア、フザルバイジャー、メディナ、メッカ、ヤマン擔當稅務廳を 'Alī b. Saīh が、al-Gazīra (高イラーク) 擔當稅務廳を Muhammad b. Ismā'īl がそれぞれ擔當してゐた。(ただ al-Rasīd のカリフ即位當時では、al-Sawād 擔當稅務廳はま

だ (Trāq 擔當〔稅務〕廳と云われしこと。Gāhš. 177)

- (4) [305H 年頃] ある書記達は不注意にや大物の Ahmad b. al-ʿAbbās b. ʿIsā b. Šayḥ のなりじ<sup>レ</sup> Amid なるじ<sup>レ</sup>〔祖父〕 ʿIsā b. Šayḥ が授任をわけていた全城の徴税請負に關する法裁書<sup>法裁書</sup>を作成し、彼の ʿulām (備兵) 達を自由人令 (rasm al-aḥrār) から奴隸令 (rasm al-mamālīk) の身分に移換し、彼および付隨者全員の俸給の増額を認めた。al-Šayḥ (= Ahmad ..... b. Šayḥ) は西部方面廳へ行き、その文書の遂行を求め、赴任〔命令〕 (ḥurūḡ) が發せられた。彼がこうしつことなりじ<sup>レ</sup>〔西部方面廳長官〕 Abū Ahmad al-Muḥassin ち〔契約〕負課のある條件に疑問を持たず、父 (宰相) にその検討を依頼した。…… (Hiāl 146)
- (5) Ibn al-Nadīm : al-Fihrist, p. 196.
- (6) ホワリズミーによれば「mardud は徴税官に還付され、しかも彼に屬するとは計算をわけていないもの (Maṭ. 41)」とあつて、帳簿上に載らない徴税官の利益と考えられる。
- (7) 306H 年の ʿAlī b. ʿIsā の豫算表じ<sup>レ</sup> ʿihṡabāt とは徴税官達が稅取總額 (uṣūl al-irṭifa) から控除するものじ<sup>レ</sup>、その出納が慣例となつてゐるもの、とあつて、「經常費」のことじ<sup>レ</sup>ある (A. v. Kremer : Ueber das Einnahmebudget des Abbasiden-Reiches vom Jahre 306H, p. 309)。
- (8) Wāsit はハムラとバグダードの中間にある都市じ<sup>レ</sup>、その所轄地は大濕地帯 (Baṭayḥ) を含み、その干拓を通じて大規模な農業經營が行われた土地である。
- (6) Qumm は 189H (804-5) 年じ<sup>レ</sup> Isfahān から分離して獨立の徴税區となつたじ<sup>レ</sup> (A. K. S. Lambton : An account of the Tārikhi Qumm, BSOAS, XII, 1948, p. 587) その後々屢々 Isfahān の徴税官じ<sup>レ</sup>つて徴税をされた。
- (6) 彼は兄 ʿAbd Allāh b. al-Ḥasan al-Narsī といふじ<sup>レ</sup> 280H 年度の國家豫算表作成に活躍した徴税請負人 Ahmad b. Muḥammad al-Ṭāʾi の書記をつづつたが、主人の死 (281H) 後、獨立して徴税請負人となつた (Hiāl 104, 109, 171-72 参照)。
- (11) Hiāl 44. Ḥamid b. al-ʿAbbās の宰相時代じ<sup>レ</sup>、ハジニヤなるじ<sup>レ</sup>ハジニヤの徴税請負人じ<sup>レ</sup>つた Abū Zunbūr al-Ḥusayn b. Ahmad al-Maḡarāʾi じ<sup>レ</sup> (……) の後更迭をわづマシタに繼任しつたが、別に追徴金は取立つられなかつた。ところが中央じ<sup>レ</sup>政變が起る—— Ibn al-Furāt の第三次宰相——首都じ<sup>レ</sup>喚問された。裁判官や官廳官吏達が召集をわづ<sup>レ</sup> Abū Zunbūr は會議場に導かれた。すづじ<sup>レ</sup> al-Muḥassin や西部方面廳における彼の書記 Abū l-ʿAlā b. Saḡīrā が出席しつづつ、彼らは彼に係る當該地の徴税業務じ<sup>レ</sup>つたの諸種の書類を提出し、その諸事項について検査がなされた。その結果、宰相 Ibn al-Furāt じ<sup>レ</sup>彼じ<sup>レ</sup> 2,400,000 dinār を義務づけ、その過半額を要求じ<sup>レ</sup>たが、700,000 dinār じ<sup>レ</sup>落着き、殘額の證券 (ḡat) を取つて al-Muḡtadir じ<sup>レ</sup>提示した。
- (9) Tab. VIII, 193. [285H] ..... 同口 al-Muʿtaḍid の mawṭāʾa Fakīk じ<sup>レ</sup> al-Mawṣilʾ Diyār Rabīʿa Diyār Muḡdarʾ シムン邊境 ʿGazīra 等の徴税官達の業務の監察のため Baḡdād を出

發した。Sulī 231. (331H年大總督 Nasir al-Dawla は) 耕作とその土木灌漑工事に對する監察のため、Almad b. 'Ali al-Kufi を派遣した。

(13) カリフ al-Rādi の宰相 (324H)° al-Muqaddir の宰相 'Ali b. 'Isā の弟 Ibn al-Nadīm : al-Fihrist, p. 192.

(14) 地方財政は當該地方の公庫 (bayt al-māl) にまつてまかなはる。Mez : Die Renaissance des Islāms, pp. 102-03 參照。313~14H 頃には全國の大半が徵稅請負人達の掌中にあつたが、國庫への送金義務をあまり履行していなかつた (Hilāl 312; Misk. I, 150 參照)。この状態は末期になるほど進行する。

## 五 財政補填策としての公債の發行と

アル・サワードの穀物行政

一會計年度中に豫算に定められた歳出を執行するよう承認されている充足資金に不足が生じた場合、政府は經費の補填に如何なる方法を取つたか。ヒラール所収 Abū 'Abd Allāh b. Zīnī によれば、宰相 'Ubayd Allāh b. Sulaymān が將軍 Badr al-Mu'adidi と al-Gabal (中部イラン) に趣いたとき (283H年 : Tab. VIII, 175)° 息子の al-Qasim b. 'Ubayd Allāh を宰相代理に任命して行つたが、彼は一時財政困難に陥り、俸給などの支拂請求がひん

ぱんとなつて、資金調達手段として、

彼はやむなく税金が到着し、その辨濟金 (ṭawāq) を還付するまでの借債 (qard) とし、[カリフ] al-Mu'adid から (即ちカリフ私庫 bayt mal al-ḥassa か) 200,000 dinar を懇請せざるをえなかつた。……

al-Qasim b. 'Ubayd Allāh はこの借入の模様を父宰相に知らせたところ、宰相は息子の行爲を罪を犯したものと見て非難し、そのような際には、

商人達 (ṭuḡḡar : ṭuḡḡar の複數形) より資金の前借を求め (istas-lafa)° 自己や父の金からその利子額 (qadr al-rubh) を支辨するようにしなければならず、お前はしてはならない行爲をしたのだと教えた (Hilāl 187-88)。

とあつて、すでに第三期初に國家財政の資金の借入調達に二方法が知られている。勿論このいずれも國家債務を形成するわけであるが、政策的には商人よりの istis-lafa (の行爲名詞) が妥當とされ、重要視されている。前者の借債 (qard) の方法でカリフから借入れることはこれ以外にも行われている。

宰相 Abū 'Ali al-Hāqāni の執政中 (299-300H) に、借債の形でカリフ私庫 (bayt mal al-ḥassa) から國庫 (bayt mal al-'amma) へ

1,600,000 dinar が振替られ、しかも辨済金として 40,000 dinar しか償還されなかった (Hilāl 262°)。

しかし次の宰相 (Ali b. Īsā は前宰相の裁判で、やはりこれを非難している (Arīb 41°) また宰相 (Ali b. al-Furāt が回曆二九〇年にカリフ私庫に借債を申入れて免職されている (Hilāl 28°) この方法は宰相の失政を意味し、従つてその地位を危険に陥れたので、カリフ以外から借入れることもあつた。<sup>(1)</sup> 當時の一般商取引で用いられた借債は利子付で、貸借兩者の信用をもとにしてゐた。<sup>(2)</sup> 貸手から云へば無擔保の信用貸付である。政府に貸付ける場合も同様であつた。ミスカワイフによれば、回曆三一九年 ša'ban (Ⅷ) 月頃、

[Abū Bakr Ibn Qarāba 子] 宰相 Abū l-Qāsim al-Kalwādāni 2 1 dinar 2 0 0 1 dirham の利子率を (bi-riḥ)「(徵稅請負人) al-Barīd 家の〔たに係る金＝徵稅請負金〕を當にして貸付けた (yaqrīdu) (Misk. I, 213°)。

彼は次の宰相 al-Ḥusayn b. al-Qāsim にも同様「徵稅請負人達 (dumana) に係る金全額」を貸付けてゐる (Misk. I, 220°)。政府が償還資金として豫定しているのは無論租税であるが、これには徵稅請負という保證が介在し、しかも

この保證はすでに安全度の低いものであつた (第四節註(5) 参照)。徵稅請負人の契約書は擔保としては無價值であり、この貸付の刺激はもはや偽となつてゐた國家信用であつた。事實彼は政府から償還金を取立てることが不可能になつてゐる (Misk. I, 231°)。従つてこの貸付の利子率も月約七°という高利であつた。<sup>(3)</sup>

借入調達的手段としては、借債よりもむしろ後者の商人よりの istislaḥ が利用された。<sup>(4)</sup>

宰相 (Ali b. Īsā (301-04H) は金を當然支拂うべきなのに、その〔充足〕額がないとき、各地から到着した手形 (safatig: suftaga の複數形) を擔保に、商人達 (tugḡar) から前借を求めたが (istas-lafa) 1 dinar 2 0 0 1 ½ dirham (= ¼ dirham) の利子率を (bi-riḥ) 10,000 dinar —— 即ち毎月 2,500 dirham が利子 (arḥab: riḥ の複數形) として彼に義務づけられる——も用意せられたことがあつた (Hilāl 81; al-Tanḥī: Niṣwār al-muḥadara, VIII, RAAD, 1930, p. 85°)。

これによれば istislaḥ 貸付の利子率は前述の借債の ¼、即ち月約一・七° (年二〇°) となる。低利の根據はこれが擔保貸付であることによる。さて擔保となつてゐる「各地から到着した手形 (Misk. I, 23 参照)」の内容であるが、

この手形の振出人は勿論徴税官もしくはこれに類する機関で、擔保品は租税である。ミスカウィフによれば、

〔回曆三三三年〕 Mawsil 遠征よりの歸還後、以前宰相〕 Abu 'Ali [b. Muqla] が金の前借を求めた (istaslafa) 商人達がやつて来た。彼らはそのときに購入〔契約〕した穀物 (ḡallāt) をまだ渡されていなかったため、その金額の還付を要求した。…… (Misk. I, 329)

とあつて、貸付の際、その代價に政府分の穀物が充てられている。この事件は商人達に對する政府の信用を失わせたものと見え、翌三三四年同じ宰相について、

al-Saḡī 隊と al-Huḡarī 傭兵隊が俸餉の支拂を求めたので、宰相 [Abū 'Alī b. Muqla] は募商達 (mayāsir al-tuḡḡār) に對し、手形 (salṭūḡ) を書くから前貸するよう請求したが、彼らは隠遁してしまつた。そこで製粉商 (daqqaq) Ibn Ḡubayr を〔捕えて〕痛打し、彼から金を没収した。…… (Sulī 76)

とあるように、もはや政府は商人達の貸付の対象にならなかつたのであるが、この資料で注意しなければならないのは政府が信用借入を行う際、手形を發行していた事實である。この手形は云うまでもなく債務證券であり、しかも租税特に政府分穀物を擔保とした一種の公債で、この當時では強制的に割當てる強制公債の色彩を持つていた。更に前

の資料と合せて注目を要するのは、この公債の買手、即ち貸付商人が穀物關係商であることを豫想させることである。ヒラール (153-59) には、宰相 'Alī b. al-Furāt が宮廷人や官吏のあらゆる公務階級に對して書簡中などで用いた修辭形式が記されているが、その文中に「商人達、即ち穀物の買手達 (al-tuḡḡār al-mubtā'una li-l-ḡallāt) (p. 158, l. 13-14) とあつて、商人としてはこれだけであり、いわゆる民間人に近い者ではこの商人以外にない。この「穀物」とは公租として國家が收納した穀物である。ヒラールによれば、回曆三一五年頃、Diyār Rabi'a (南部高イラク) のおも

だつた農場經營者達 (ṭunna' : ṭānī' の複數形) や分益小作人達が首都にやつて来て、三一一〜一三年に約定せられた賦課規約 (mu'āmalāt) について訴願した内容の一つに、

「彼らのおもだつた者達や商人達に對し、政府穀物 (ḡallāt al-sultāniya) を法外で破産してしまい、そんな價格で買わたることを強制した。」 (Hilāl 337)

とあつて、「政府穀物」と呼ばれているのがそれである。ここでも徴税請負の適格者同様(第四節74頁参照)、穀物の買手として商人や農場經營者ら經濟的實力者が登場する。



殺物商人と政府との交渉について、ヒラール所収 al-Ta-nūhī によれば、

Abū Bakr b. Muqāṭil (イフシード朝の財政長官として350年後) はエジプトで語った。

「私は以前政府から『殺物を』買っていた。というのは私は殺物商人 (ṭagīr galla) で、あるとき商賣に失敗し、その代價のうち 20,000 dinār が未拂殘金となった。宰相 (ʿAlī b. ʿIsā は私を伺候させ、これを要求したが、私にはその手段がなかった。彼は私に云った。『未拂殘額が分るように、お前の買入額と送金額の總目<sup>アズム</sup>を記した計算書<sup>ヒサブ</sup>を作成せよ。…… (Ḥīal 348)

とあるように、政府殺物を購入する際、商人は代價全額を即時現金拂いとせず、恐らく手形を振出していたと思われる。政府殺物の現金化は殺物商人の手腕に左右され、それだけに政府と殺物商人との密接な關係が窺われる。また徴税官<sup>ミル</sup>の提出する計算書<sup>ヒサブ</sup>および當該稅務官廳がこれに對して作成する意見書<sup>ムアヤツ</sup>にも殺物に關する事項が重要事項として扱われている (第四節 66-67 頁參照)。宰相 (ʿAlī b. al-Furāt の知人が民間人たる父のために何か職務を授けて欲しいと求めたところ、彼は裁判 (qaḍāʾ) 行政 (ʿamāla) 經濟<sup>ヒスブ</sup>檢察 (ḥisba) 訴訟<sup>マウリヤ</sup>調查 (maẓālim) などの任務はいずれも不適當として、

「……お前にふさわしいものとして、多くの徵稅區<sup>カサビーヤ</sup> (ṭassūḡ) における殺物〔業務〕が委ねられるであろう。お前はそれをアル・サワードから選べばよい。もしアル・サワードのすべての殺物を扱いたいようになつたならば、その權利はお前に與えられよう。……」 (Ḥīal 259)

と述べていることは、殺物取扱業務に對する政府當局者の考え方を示すものとして興味深い。殺物業務はここに述べられている他の業務と違い、専門的知識を必要とせず、財力と商機の才さえあれば、如何なる身分の者でもこれに従事することができ、商人達が國家權力と結びつく絶好の據點であつた。

さて當面の政府殺物であるが、前の資料にもあるように、これは中央政府の直轄州であるアル・サワードで、現物租稅として國庫に收納された殺物であつて、その起源は第二代カリフ al-Mansūr の治世末、第三代カリフ al-Mahdī 初回曆一五八一—九 (七七五) 年のアル・サワードにおける稅制改革に溯る。即ち現銀納で、土地測量によつてきまる *niṣāḥa* 制から現物納で産額比率による *Muḡsama* 制<sup>ムグサーマ</sup>の改革で、周知の事實であるが、これまでのところ制度史的考察の域をあまり出ていない。<sup>(7)</sup> 殘念ながらこの改革に關

する資料として、年代の近い史書ではバラーズリー (279/892 没) に僅かに、

Yahya b. Adam (203/818 没) 云う。<sup>(9)</sup> アル・サワードの産額比率<sup>ムカーサマ</sup>について、人々は al-Mansūr の治世末にカリフにそれを求めたが、それを實施する前に死に、<sup>(10)</sup> al-Mahdi が 'Akabat Hulwan を除いてその實施を命じた (al-Baladuri: Futūḥ al-buldān, Cairo, 1932, p. 271)。

と記されているだけで、しかもこれは法理論家の傳承である。時代は降るが法理論家マールディー (450/1057 没) は次のように述べている。

アル・サワードでは土地測量による <sup>バラーグ</sup>barāğ (現銀納) が行われていたが、ファッハース朝の al-Mansūr はこの <sup>バラーグ</sup>barāğ の代りに産額比率<sup>ムカーサマ</sup>による現物納<sup>マカサマ</sup>とすることを發布した。何故なら「穀」價が下落し、「農民は」穀物を <sup>バラーグ</sup>barāğ (現銀) に換えることができず、アル・サワードが荒廢したので、それを産額比率としたのである。〔宰相〕Abū 'Ubayd Allāh は <sup>バラーグ</sup>barāğ 地を、流水灌漑地では<sup>ムカーサマ</sup>……という産額比率にすることを al-Mahdi に進言した。また<sup>ムカーサマ</sup>椰干<sup>タマール</sup>、ブドウ、果樹については市場や港津との距離を考慮した上で、土地測量による <sup>バラーグ</sup>barāğ (現銀納) を行うよう進言した。<sup>(11)</sup>

Ibn al-Fiqāqa (1302 著) : al-Faḥrī, (Cairo, 1339H, p. 131) にもこの改革以前では政府は穀物の代りに一定額

の <sup>バラーグ</sup>barāğ (現銀) を徴収し、産額比率による折半を行つていなかったと述べられている。タバリーによれば、

この (172H) 年、Harūn al-Rasīd は<sup>ムカーサマ</sup>を徴収されていたアル・サワードの住民からその<sup>ムカーサマ</sup>を免除した (即ち税率を<sup>ムカーサマ</sup>にした) (Tab. VI, 446)。

また回曆二〇五年の條に、

この年 al-Ma'mūn はアル・サワードの住民に對する産額比率を<sup>ムカーサマ</sup>にするよう命じた。これまでは<sup>ムカーサマ</sup>の比率で折半されていた (Tab. VII, 156)。

とあるから、アル・サワードにおけるこの改革の實施は間違いない。法理論家達は、要するに單位穀物當りの現銀化率が非常に低下したので、農民の要求によつて實施したと彼らなりに説明しているが、これではアル・サワードのみに限定された理由が解明されない。もう少し當時の歴史的背景を見る必要がある。ジャフシヤリーに、

al-Mansūr は Hammād al-Turki にアル・サワードの <sup>タマール</sup>ta'ānī (稅務調査) を委ね、<sup>(12)</sup> al-Anbar に滞在すること……を命じた (Gāh. 134)。

とあり、この改革の前提として稅務一般調査を行つてゐるが、al-Mahdi がカリフになるまで <sup>バラーグ</sup>barāğ 納稅民はあら

ゆる拷問責めを受け、苛酷な強制取立を蒙つていたと伝えられている (Gahs. 142)。この重税は恐らく回曆一四五年に始まつた新都バグダードの造營に連關すると考えられ、その資金調達にはあらゆる方法を取つたらしい。特に al-Mansūr が目をつけたのは穀價の變動とその投機性であつた。

〔一五〇年頃以降〕 Abū Ga'far [al-Mansūr] の治世中、物價が下落した。彼は〔宰相〕 Abū Ayyūb [al-Murjānī] じ al-Kūfa や al-Basra の sawād 地帯 (要するにアル・サワード) の小麦を賣買させ、その差益 (ribh) を求めようと考へ、そうすることゝ決定し、このことについて al-Mansūr は宰相に書簡を書き、彼を當該諸官廳に滞留させ、ときどき〔利益〕金を請求し、それが少しづつ送られた。物價の下落が繼續的に起り、al-Mansūr は強制的に金を請求し、宰相を苦しめた。…… (Gahs. 117)

このように、政府官吏を穀物の投機に當らせており、タバリも、

Ibrahim b. Musā b. 'Isā b. Musā によれば、全國の驛遞官達は al-Mansūr のカリフ時代に、彼に毎日小麦、雜穀類、パン種などのあらゆる食品の價格、……などを書送つていた。……物價について、それが正常と認められる場合はよいが、幾ばくかの變動があれば、當該地の行政官や徵稅官に書簡を送り、その價格が

變動した理由を質し、答申の書狀が到着するや、その價格が正常な状態になるまでこれに熱中した (Tab. VI, 336-37)。

と記しているように、驛遞網を利用して相場の変動をつかみ、徵稅官らに賣買させていたが、結局は繼續的な下落によつてこの投機に失敗したのである。これはアッバース朝も確立期から安定期に入り、活發化した商人達に政府が太刀打できなかったことを物語っている。現銀納の土地測量制であれば、徵稅官は農民と商人との穀物の賣買に立會うが、あるいは商人同様買手になるかであつて、いずれにしても低價格で取引が行われ、農民はもとより政府側としても利益が薄いのに反し、商人はのちにその穀物を時價で自由に轉賣でき、この制度は彼らに有利な投機を生ぜしめている。これに對し現物納の産額比率では徵稅官の徵收態度に難點はあるが、政府は商人に先んじて穀物を掌握し、相場を左右することができる。なかでもアル・サワードはバグダードを始め大消費都市をひかえて相場の変動が激しいこと、他州とは比較にならないほど収獲高が大きいこと、ティグリス・ユーフラテス兩河を始め運河網が發達して穀物輸送が便利であること、直轄州のため徵稅官に對する監督が

比較的容易であることなどの條件を考慮して、al-Mansūr は一見逆コースと見えるこの改革を斷行したのであつて、他州では從來通り土地測量を施行しているから、これは全く政府の立場からなされたものと云わねばならない。即ちアル・サワードの穀物の獨占は穀物の部分的、それも割合の大きい專賣を意味し、國庫上重要な財源となつた。

このような政府穀物はいずれは商人達に拂下げねばならないが、第一期の末についてジャフシャーリーに次のような記載がある。カリフ al-Ma'mun がメルブよりバグダードに入城して内亂を鎮定したのち、八二〇年頃宰相 al-Faḍl b. Saḥl が内亂時に世話になり、それで貧しくなつていた一老人 Ḥudābūd への恩返しをしたという話から、

……[宰相と密接な關係にあつた 'Abd Allāh b. Bīr は]云つた。Bagdad の商人達はアル・サワードの穀物について討議するため、代理人達や使いの者達を〔宰相〕al-Faḍl b. Saḥl のもとに派遣し、しかも義務づけられていない贈物までした。宰相は私に云つた。「今日私とアル・サワードの商人達の代理人達との間で取かわされたことを知つてゐるだろう。私は（この機會を利用して）彼らをして彼（Ḥudābūd）に qabūl を贈與させたい。彼らを伺候させ、Ḥudābūd は彼ら同様穀物賣却における協同權（＝組合權：shirka）を持つてゐるという條件で賣却を執行せよ」

と。私はそのようにし、宰相は Ḥudābūd に云つた。「今は私とここに居て、しばらくして彼らのところへ行きなさい。彼らが貴下をおどして、『お前は我々と同様自らの代理人を派遣し、彼らに金を貸し、費用を拂つてやらねばならないから』と云つて、貴下に割前 (sahn) としての貴下の純益 (riḥb) 100,000 dirham を贈與しようとするだろうが、50,000 dinār 以上になるまで受取つてはいけません。」「承知しました。彼が行くと待つていて、al-Faḍl [b. Saḥl] は彼につつて何も知らせない」と云つて〔不安に思ひ〕、〔qabūl の〕競が續き、50,000 dinār で彼に承諾した。彼らはすぐその金を支拂ひ、〔穀物〕移讓證書 (kutub al-tas-lim) を持つて立去つた。……(Gaḥs. 319-20)

qabūl とは不勞利潤のことで、ここでは一組合員の利權を放棄させる代りに、組合員（商人）達から差出される棄權料の意味で用いられている。これによるとアル・サワードの政府穀物を購入する商人組合が存在していたことは明らかで、賣手獨占の競賣の通則として買手達の連合が行われていた。政府から協同權を付與された Ḥudābūd の資格は即ち同じ語原を持つ musārrik (協同者) であり、'Alī b. al-Furāt が第三期初に述べてゐる言葉によると、弱少の徵稅官を援助するよう地方にも派遣されてゐる (Hiāl 9)。商人達の連合による競賣價格の提出に對抗するため、政府

は *musārik* <sup>ムサーリーク</sup> を競賣に加入させて競賣價格をつり上げるか、もしくは棄權料を獲得させていたことが分る。al-Ma'mūn の當時は財政が安定していた頃で、政府は穀物賣却においても有利な立場にあつた。ところが第三期になると事情はやや變化している。前述の宰相 al-Faḍl b. Sahl の場合に似た話で、第三期初、宰相 Ubayd Allāh b. Sulaymān は穀物商人達を伺候させて、アル・サワードの政府穀物 100,000 kurr の賣價を彼らと交渉決定し、その穀物を 1 kurr につき 1 dinār の割引率で一旦 Abu 'Abd Allāh という宰相が以前世話になつた人に形式的に賣渡し、宰相は商人達にその全差益 100,000 dinār を即金で彼に支拂わせ、その代り買付金は穀物が當該地で渡されるまじ猶豫しつつある (al-Tanūjī: *Niswār al-muhādāra*, I, ed. D.S. Margoliouth, London, 1921, p. 44-45)。この場合では政府は競賣に *musārik* <sup>ムサーリーク</sup> を加入させる權利を放棄し、商人達と對等に商取引を行う代り、彼らから單位穀物當り、一定額の歩合を獲得している。同じくタヌーヒー (*Niswār al-muhādāra*, I, p. 168; Hilāl 215 参照) にもはやこのような形式的讓渡に頼らず、明白に制度化され

た例がある。(Aḥī b. al-Furāt が宰相になつて (295 H) あるとき、その書記 Ibn Muqla じ)

「Ibn al-Uḥmūs ら十人の商人達の伺候を命じ、彼らにアル・サワードの穀物のうちから 30,000 kurr を買わせ、彼らとその價格を取りきめ、1 kurr につき 2 dinār を *istāḥn* <sup>イスタハーン</sup> (控除) し、その *istīṭna* <sup>イステイトナ</sup> 金 (mal al-istīṭna) を急ぎ支拂うよう彼らに要求せよ。」

と命じている。*istīṭna* の「控除」という原義は第三者に對する割引と同じであるが、この賣價交渉では第三者を介さず、あらかじめ *istīṭna* 金を即金で取るといふ條件が附加されている。當面の話では *istīṭna* 金が三日目に提出されると同時に、穀物の引渡地ならびに穀物代金を當該地で支拂うよう指定した穀物移讓證書が商人達に渡されている。要するに *istīṭna* 金は政府穀物拂下げに伴う利權料である。當時の小麥 1 kurr は約 50 dinār であつたから (Hilāl 188; Misk. 75 参照)、利權料の拂下げ價格に對する割合は約 4% となる。徵稅請負人出身の徵稅官は中央におけるこのような穀物拂下げに關する交渉權も委ねられたらしく (Hilāl 171: 第四節 70 頁参照)、*istīṭna* 金を中央政府に送つてゐるが、その徵收義務にやや負擔を感じ

ている (Hial 93; Misk. I, 61 参照)。

以上のような穀物拂下げ業務を通じて見られる現象は御用商人層の育成である。政府が *islat* という形で公債を発行し、半ば義務的に商人達に買わすという權力は穀物拂下げ利権との交換によつて生まれたのである。第三期末、回曆三三二年 *ḡu-l-hiḡga* (XII) 月頃にはフッバース朝の財政は全く破産状態にあつて、スーリーに、

「資金は缺乏してゐた。何故なら彼 [Abū Gaʿfar b. Širzād] (大總督の書記<sup>これまた</sup>) には頼るべき物資もなく、〔諸地方から〕到着するもの (手形) を擔保に商人達から前借を求め、彼らの中の助力者達に借債を要求することもできなかった。… (Sulī 264)

と記されているが、この借入調達の不能は穀物拂下げ利権と交換に受けていた國家信用がすべてに皆無であつたばかりでなく、政府が商人階級の經濟力に直接的な打撃を与えた結果である。

〔同年 *safar* (II) 月頃〕 Abū Gaʿfar b. Širzād は商人達に金を要求し、その大部分を隠匿した (Sulī 250)。

〔三三〕二年度の人頭税 (*ḡawālī*) が *rabīʿ al-awwal* (III) 月に徴集され、ズィンマの民 (異教徒) は極度の虐待と壓制を蒙つた (Ibid., 251)。

Bagdād の商人達は苛酷な壓制と虐待を受け、人々は逃げまどいて、富裕なユダヤ人やゾロアスター教徒の一團は Bagdād からシリフへ移住した (Ibid., 251)。

このように、財政に重要な役割を果していた政府と商人層との相互の組織を根底から破壊し、フッバース朝國家の内部的崩壊を決定化したのである。

#### 註

- (1) Hial 262. 「宰相 Abū ʿAlī al-Ḥāḡanī のやうに全權を持つてゐた Abū l-Haylām 〔辨濟金 (*ʿiwāq*) を諸徵稅區 (の租稅) に割當する借債の方法で、官廳官吏や裁判官やカリフの從臣達から強制的に金を借りた。同様例 Hial 259; Misk. I, 164; al-Tanūḡi (384/994) : Niṣwār al-muḥāḡara, VIII, (Revue de l'Académie arabe, Damas, 1930), p. 85 参照。
- (2) ʿA. A. Dūri : Taʾrīḥ al-ʿIrāq al-iqtisādī fi l-qarn al-rabīʿ al-ḡiri, (Studies on the economic life of Mesopotamia in the 10th century, Bagdād, 1948), p. 122 参照。
- (3) Mez : Die Renaissance des Islāms, p. 124. *dīnār* (金貨單位) と *dirham* (銀貨單位) の比價は當時は大體 15:1 であつた (Dūri : Taʾrīḥ al-ʿIrāq al-iqtisādī, p. 222 参照)。これは金銀兩貨の流通標準貨幣について定められたと考えられ、その理由として政府がこの規格にかけ離れた不良貨幣 (特に銀貨) の使用を禁じていたことが挙げられる (Sulī 71 参照)。
- (4) この方法は地方政府でも行われてゐた。ʿArib 186 参照。

- (5) この部分は 'Ali b. 'Isā (第一次宰相時代) が不正を犯した Yusuf b. Fihās と Harūn b. 'Imrān の二人の貨幣取扱吏 (ḡahbad) に對して行った裁判記事の挿入文<sup>27</sup>。W. Fischel (The origin of banking in mediaeval Islam, JRAS, 1933, pp. 348, 581-82) はこの引用文中の tuḡḡār (商人 tāḡīr の複數形) をこれら二人の貨幣取扱吏と同一視しているが、これは内容からして全くの誤りで、もし同一視が許されるとしても文法上 tuḡḡār は双數形 (第三格) の tāḡīrayni を取らねばならぬ。
- (6) この借入調達は Mawṣil 遠征資金として行われた。
- (7) F. Löffkegard: Islamic taxation in the classic period, p. 113; Lambton: Landlord and peasant in Persia, p. 32-33; C. Cahen: Fiscalité, propriété, antagonismes sociaux en Haute-Mésotamie au temps des premiers 'Abbāsides d'après Denys de Tell-Mahé, (Arabica 1/2, 1954), p. 144 參照。
- (8) Kitāb al-ḡarāḡ の著者。ただし彼の著書この傳承はない。
- (9) al-Mawardi: al-Aḥkām al-sulṭāniya, Cairo, N.D., p. 170. <ハベ>派 Abū Ya'la al-Farrā' al-Hanbalī (458/1066 没): al-Aḥkām al-sulṭāniya, Cairo, 1938, p. 169-70 については同文參照。
- (10) C. Cahen: Fiscalité ..... au temps des premiers 'Abbāsides, p. 137 參照。
- (11) Ibid., p. 143-44 參照。
- (12) Ḡahš 272. (al-Aḥwāz の徵稅 al-Farāḡ al-Ruḥḡāḡi は人民に對

して壓制を行い、その地方の税金を横領しているという情報が入り、1924 年免職され、カリフ al-Rasīd によつて裁判されたときの敘述に).....[al-Rasīd は云つた]。「汝は穀物の賣却時にあたり、商人達を召集したか、また代價を確かめてからその賣却を執行させたか。」「その賣却については私には商人達と同様割前 (iṣṣa) がありました。あるときは得をし、あるときは損をしました。結局私には二年の任期中にこれやその他から 10,000,000 dirham が集まりました。」「大〔穀物〕貯蔵庫を設けたか。」「.....」

## 六 結 語

國家歲計面を通じて見た以上の考察から次のように云えると思う。確立期を経て安定期に入つたアッバース朝は、その國家機構を維持するために財源としてアル・サワードの穀物を掌握した。これは現物納の土地測量制によつて國家と納稅者たる農民との間に生じた商人による中間利益を押さえるのが目的であつた。しかし利潤を追求する商人、農場經營者ら經濟的實力者からなる中間階級は次第に重要な社會的地位を占めるに至り、やはり次第に內的膨脹を遂げていた國家と激しい對立關係を持つに至つた。豫算技術を頂點として、稅務行政機構が発達したのもこの中間階級勢

力に對する官僚階級の對抗策の現れである。ところがこの對立は國家が一步後退するという形で融和した。それが徵稅請負<sup>グレイブ</sup>であり、アル・サワードの穀物業務を通じての御用商人層の育成である。財力を持つていても、財政經濟に關する専門的知識を持たない者に對するこの行政權の過半的讓渡は、複雑な稅務行政機構が存在して始めて可能であり、中央集權に支えられて有効であつた。他面この融和は下層階級に對する經濟的壓迫を惹起した。ここにアッバース朝國家の内部的崩壞の要因があつたのではあるまいか。なほ本稿では充分に觸れることができなかった中間階級の伸張については私領地經營<sup>グレイブ</sup>の發展にも關連するので、のちの機會に詳論したい。

〔付記〕 本文中使用した括弧のうち、「」は語句の補足を、（ ）は典據、もしくは先行の語句の原形または解説を示す。

## 東洋史研究叢刊之八

### 清末政治思想研究

京都大學助教 小野川秀美 著

體裁總クロス製 本文四八〇頁 定價千百圓

#### 〔内容〕

- 一、清末洋務派の運動
- 一、戊戌變法と湖南省
- 一、清末變法論の成立
- 一、清末の思想と進化論
- 一、康有爲の變法論
- 一、章炳麟の排滿思想
- 一、譚嗣同の變革論

目次でも明らかなように、本書は洋務論・變法論から革命論へと進んだ清末政治思想の變遷を、その指導的役割を果した康有爲・譚嗣同・章炳麟らを中心として、體系的に究明したものである。これは新中國革命に歴史的解明を與えんとする著者の十餘年にわたる辛酸の結晶であるとともに、専門的研究に乏しいこの分野の今後の研究に、大きな礎をきずいたものでもある。

右書御希望の方は本會宛お申込下さい。（國內送料當方負擔）

東洋史研究會